

2011年 11月 26日

関係各位

NPO 法人まごころサービス福島センター
理事長 須田 弘子
福島県福島市在庭坂字南林 60 - 2
024-573-9321
genki.nizinowa@gmail.com

第一回 虹の和交流会 報告書

福島県地域支え合い体制づくり助成事業（飯館村・富岡町・浪江町・双葉町連携）として11月より試験運用に入っておりました『事業名：福島県高齢者等サポート拠点設置運営事業』【元気虹の和プロジェクト】～多世代交流センター 高湯街道虹の和村～（以下虹の和村）において、11月23日（金）にオープニングイベントとして『第一回 虹の和交流会』を開催致しました。事業発足までご尽力賜った方々に感謝の意を表すとともに、これからもご指導ご鞭撻を賜りたく、表題につき下記の通りご報告申し上げます。

記

- I. 報告書作成者 元気虹の和プロジェクト事務局
- II. 日時 平成24年 11月23日（金）
- III. 会場 多世代交流センター 高湯街道・虹の和村
（NPO 法人まごころサービス福島センター）
福島市在庭坂字南林60-2
- IV. イベント内容 11時30分 オープニングセレモニー
12時00分 昼食 浪江焼きそば（浪江町 笹谷仮設自治会）
なめこ汁 （富岡町 富岡サロン）
13時00分 楽つみ木広場ワークショップ
16時00分 終了

V. 報告書要旨

- (1) 昼食。浪江町笹谷東部仮設自治会による「浪江焼きそば」と、富岡町借り上げ仮設の富岡サロンによる「なめこ汁」について、利用者をお客様にするのではなく、利用者自身がつくるプロジェクトにしていくための試みについて。
- (2) 楽つみ木広場ワークショップについて。木楽舎つみ木研究所萩野雅之氏による、つみ木ワークショップのファシリテーションと、老幼統合相互ケアの試みについて。
- (3) 第一回虹の和交流会を通して行われた、一般社団法人東京臨床心理士会 有志・福島県 保健士・一般社団法人 C3NP（継続ケア・キュアネットワークプロジェクト）による【心のケア】事業の試みについて
- (4) 来夢バスの運用について
- (5) 第一回虹の和交流会という『場』を設けることによるソーシャル・リソース・コーディネーターとしての役割と、CBO（Community-based Organization）インキュベーターとしての役割の試みについて。

VI. 報告事項等

- (1) 浪江町笹谷東部仮設自治会による「浪江やきそば」と、富岡町借り上げ仮設の富岡サロンによる「なめこ汁」の昼食について。



浪江町の笹谷東部集合仮設自治会長を含め、5名のチームにより「浪江焼きそば」がふるまわれた。笹谷東部集合仮設自治会は自治会としての活動が盛んで、多世代交流センター 高湯街道・虹の和村の活用にも積極的である。育成会活動もありキッズパークも11月19日（月）の時点で既に利用している。

11時から準備が始まり、10kg、約100人分用意した「浪江焼きそば」は完食。この料理をしている昼時の時間帯がこの日最も風が強く吹き、雨交じりの寒さの中、笹谷東部集合仮設の有志チームがずっと調理をされ、昼食後の後片付けまで一貫して担当された。

虹の和プロジェクト事務局としてこの「浪江やきそば」に関わったのは、前日までの食材の手配と、プロパンガス等器材の準備、そして当日一名の補助スタッフをつけただけである。

今後のイベント開催においても、『利用者が主役』という運営を推進し、『スタッフは黒子』に徹することで、イベントやプロジェクトを協働していく方針である。



福島市内お借り上げ仮設に居住する富岡町の方々に、サロン活動をしている方々になめこ汁の料理と配膳を担当して頂いた。

仮り上げ仮設に住まう方々の自治会組織が立ち上がりはじめているものの、その活動場所は限られ、自治会活動も十分しきれていないのが現状である。

【元気虹の和プロジェクト】は、こういった借り上げ仮設に住まう方々にも自治会活動やサロン活動の場所として利用して頂

きながら、イベントを通して虹の和村の周知と利用を促していきたい。

第一回虹の和交流会では、【元気虹の和プロジェクト】の運用が試験的にしか始まってないという状況にありながら、浪江町の笹谷東部集合仮設自治会や富岡町の富岡サロンの二つの利用コミュニティがイベントの中でプロジェクトに協働していくカタチをとることができ、今後の事業への道筋をつけられたものと考えている。

(2) 楽つみ木広場ワークショップについて。木楽舎つみ木研究所萩野雅之氏による、つみ木ワークショップのファシリテーションと、老幼統合相互ケアの試みについて。



時間になる前から続々とつみ木おじさんの前に子どもたちが集まった。



つみ木おじさんは、子どもたちだけでなく、大人の参加も呼び掛ける。



まずは円になって仰向けに寝かせ、目を瞑らせる。



「つみ木を眠りから起こします」と参加者に声をかけてつみ木をかぶせる。



参加者が起き上がり、つみ木おじさんがルールを説明する。



老若男女混じって、めいめいにつみ木の創作が始まる。



一人でもくもくとつみ木を積み上げ始める子も居れば、



友達と共同で、大きな建物の【建築】を始める子も居る。



それぞれの場所で【建築】されたものを、つみ木おじさんは道路を繋ぎ街にしてい

つみ木おじさんは一人一人に声をかけ、一つ一つのつみ木の作品を褒め、こどもたちの発言の一つ一つを「すばらしい」と言って意味をつけ、いつのまにか子どもたちは集中して街を創りはじめる。



つみ木おじさんは部屋を暗くすると、電球を使って【建築物】にあかりを灯していく。



一つ一つの建築物を『芸術』だと言って灯りを入れて、街に息吹きを吹き込んでいく。



こどもたちは息を飲み込んでつみ木おじさんと灯りの行方を見守っていたが…



いつしか何人かのこどもが、つみ木おじさんの周りに集まって、間近で一つひとつの建築物を見て回るようになり…



ついには子どもたち全員が、つみ木おじさんの後を追って街に息吹きを入れて歩いていった。

自分の【建築】に夢中になっていた子どもたちは、他人の【建築】のいい所を電灯による演出で気づき、灯りを点けたあと新たに自分の【建築】の中に取り込んでいく。

見知らぬ周りの大人に声をかけて、自分の思ったようにできないところを手伝ってもらう場面も随所で見られ、街は完成へと近づいていく。



ワークショップ開始から一時間半が過ぎて、つみ木おじさんは参加者の手を止めた。



大人たちが子どもを抱え上げて、自分たちの作った町を空中飛行で上から眺めさせていく。



空中飛行を終えたら子どもたちは集まって、大人たちに向かって【決め】のポーズをとった。『どうだ!』

ワークショップはここで終わりではない。ここから自分たちが作った街を壊してつみ木を片付けていかなければいけない。つみ木おじさんは、

「これでつみ木は壊してしまうけれども、何度でもつくり直せることを君たちはもう学んだね。」

「今日のこの時間を楽しませてくれたつみ木たちに感謝を込めて、抱きかかえるようにつみ木を崩してください」

と語りかけた。



なかなか【建築物】を崩せない子どもたち。いとおしそうに抱きかかえて…



つみ木おじさんに促されて一人目がつみ木を崩す。一人で壊せず友達と二人で「いっせいの、せ……」



最後まで崩せなかった子供たちが、最後に一緒に自分の作った【建築物】を崩した。

ワークショップに参加した人も、周りで見っていた大人も、最後はみんなでつみ木を片付けた。この時すでに子どもたち全員に「みんなで協力して」「声を掛け合いながら」片付けていくということが、自然にできていた。

そしてつみ木を片付けた後にワークショップはフィナーレに入る。



つみ木おじさんが「今日はどうして楽しかったと思いますか？」と子どもに問いかけると…



こどもたちが競うように手を挙げて、自分の意見を前に出して発表する。



一人ひとりが大事な気づきを発表していく。ひとつひとつの発表につみ木おじさんが大きくなすく。



こどもたち全員が発表を終えて、つみ木おじさんが子どもたちにプレゼントにつみ木のかげらを渡していく。

「このかけらたちに、君たち一人ひとりがメッセージを書き込んでください。」

2歳になったばかりの子どもから高齢者まで、一緒になって楽しみながら学べるワークショップを経験した。子どもたちの言葉に笑い（「遊んでる暇はねえんだよ！」）、時に考えさせられ（「何度壊れたって、あきらめなければまた建てられるから」）、短時間に成長していく子どもたちの姿を見ることができるワークショップだった。

イベントの参加者全員が必ずしも子どもと一緒に、直接に接することがなくとも、子どもたちの活動のすぐそばで子どもたちの言動と表情と成長を見守りながら時間を過ごしていくことが、高齢者にとってもとてもいい刺激になったと考える。

【元気虹の和プロジェクト】の掲げる課題のひとつ、老幼統合相互ケアのカタチのひとつであると実感した。



(3) 第一回虹の和交流会を通して行われた、一般社団法人東京臨床心理士会 有志・福島県 保健士・一般社団法人 C3NP (継続ケア・キュアネットワークプロジェクト) による【心のケア】事業の試みについて

第一回虹の和交流会には、10名にのぼる保健師・臨床心理士・医師等が参加した。

虹の和村にはテレビ電話の設置してあるプライバシーを守れる相談室が完備されており、10名の心のケアスタッフがイベント全体を通し、会場の随所で参加者と会話しながら、それぞれの判断に応じて広場での雑談、場合によっては相談室の利用と、ケース・バイ・ケースで参加者と接した。相談室に臨床心理士を常駐させるのではなく、会場内全体に普通にイベントに混じりながら『心のケア担当』のネームプレートを下げて参加者と普通に接して会話をし、必要に応じて相談室を使用するというスタイルをとった。

『心のケア』というカタチの難しい課題であるが、相談会という改まった場ではなく、通常のイベントの中で、すぐ隣に専門の知識や技能を身につけたスタッフが居て、気兼ねなく雑談のような形から心のストレスを解きほぐす会話が進んでいくのだという事例が、第一回虹の和交流会では随所で見受けられた。

日常生活の中では抑えている感情が、イベントの中の周囲の楽しい雰囲気との反動として現れることがある。その時その場にケアできるスタッフが、気軽に話しかけられるところに居るとするのは、今後も一つのカタチとして踏襲していくべきであると思われる。



イベントを通して感じたのは、あるいは子どもの教育支援の現場などを見て思うのは、『ななめの関係』の重要性である。『先生と生徒』、『医者と患者』、『カウンセラーとクライアント』という縦の関係でなく、友達という横の関係でもなく、頼れる先輩であるとか、近所の物知りのような『ななめの関係』が、ものごとを伝えていくこと、あるいは話をしていく時に有効な関係なのではないのだろうか。その『ななめの関係』が有効であるならば、今回のイベントの様に普通にスタッフと参加者が同じ作業をしながら普通に会話をし、なにかの拍子にふと話が深まっていく…その時の選択肢の一つとして相談室を活用する。

そういう場面が多くなるイベントの在り方と、こころのケアスタッフの配備を多くするという事も一案なのではないのだろうかと感じた。

(4) 来夢バスの運用について

この日のイベントでは、来夢バスがフル活動している。

第一便 笹谷東部集合仮設と富岡サロンのメンバーを乗せての会場行き

第二便 福島駅から参加スタッフを乗せて会場行き（福島駅発 11 時 30 分ごろ）

第三便 福島駅から参加スタッフを乗せて会場行き（福島駅発 12 時 30 分ごろ）

第四便 イベント終了後 笹谷東部集合仮設と富岡サロンのメンバーを乗せての帰り便

第五便 スタッフによる反省会終了後 参加スタッフを乗せての福島駅までの帰り便

オープニングイベントと言うことでスタッフに余裕がないなか、専属というカタチで動いている勝手のわかる運転手が、参加者やスタッフの足になって小回りのきく動きをしていた。第二便や第三便など、スタッフ間の情報共有が不徹底で、バスに乗る予定の人数把握にミスが生じてしまった。

バスの運行の調整、乗車予定者数の把握と乗車位置の確認等、次回イベントに課題を残した。

なお、来夢バスは当初集合仮設巡回を想定していたが、借り上げ仮設ニーズ等を考慮し、今後はオンデマンドで運行する方針である。



(5) 虹の和交流会という『場』を設けることによるソーシャル・リソース・コーディネーターとしての役割と、CBO（Community-based Organization）インキュベーターとしての役割の試みについて。

第一回虹の和交流会で、協力提携関係にある一般社団法人東京臨床心理士会有志、一般社団法人 C3NP（継続ケア・キュアネットワークプロジェクト 澁谷恭子医師）、そして地元福島・荒井恭子保健師の方々が、イベントを通して専門の分野から参加者と接する機会が持てた。また木楽舎つみ木研究所の萩野雅之氏がつみ木ワークショップを通して子どもと接し、財団法人こどもの文化研究所理事長・片岡輝氏が専門家の目でワークショップやこどもの様子を見守っていた。

そしてこれらの関係機関とイベント終了後、心のケア部門、キッズ部門に分かれてミーティングを持ち、これまでの経緯と今回のイベントの反省、そしてこれからの関わり方などの話し合いの時間を持つことができた。まもなく二年を経ようとする仮設支援は、単発・独立型支援の限界を浮き彫りにしている。私たちはこうした多様な専門性やスキルを複合的・重層的に運営していくことを目指している。これらは【虹の和プロジェクト】のソー

シャル・リソース・コーディネーターとしての役割の始まりであると認識している。

また今日のイベントには、福島学院大学の福祉学部福祉心理学科の佐藤佑貴助教授が参加し、福島大学災害ボランティアセンターに所属する福祉を専攻する学生がスタッフとして加わり、これからプロジェクトに関わっていけるソーシャル・リソースの芽を育てていった。

特に学生にはこれからも声をかけ、福島のことを福島の若者が考え、活動していく場としての多世代交流センター 高湯街道・虹の和村の立ち位置を目指していきたい。

そしてこれらはそのまま、CBO（Community-based Organization）インキュベーターとしての虹の和プロジェクトの役割を果たしていくことに繋がると考える。

最後に。

第一回虹の和交流会は、当初見込み通りの 100 余名の参加者を数え、大きな問題も発生せず成功裡に終わったと言える。同時にイベントを通して見えてきた課題もある。例えば子どもの動線を考えた安全対策。事前準備と広報活動が後手に回ったという課題。イベント参加者の人数把握と予測。スタッフ間の情報共有とスケジューリング。

とは言え元気虹の和プロジェクトとして確かな、そして大きな一歩であったと言えるだろう。協力提携関係の各機関との意識の共有に手応えを感じ、学生の意欲的な参加を得、【元気虹の和プロジェクト】としてのスタイルを見せることができたと言える。

多世代交流センターとしての長期的ビジョンを持ちながら平成 25 年 3 月までの中期的なビジョンを見据え、毎月ごとの目標を明確にしてこれからプロジェクトの進捗に取り組んでいきたい。

